

知床五湖の利用のあり方協議会（第34回）議事録

日時：平成28年3月8日（火） 13:30～15:30

場所：知床世界遺産センター レクチャールーム

議題：

- (1)平成27年度利用調整地区制度の運用結果・知床五湖園地利用者数について
- (2)平成27年度登録試験結果、平成28年度登録引率者募集について
- (3)利用適正化計画（第2期）の点検について
- (4)平成28年度の知床五湖全体スケジュール・ヒグマ活動期の運用方法について
- (5)指定認定機関の平成27年度収支報告、審査部会会計報告
- (6)その他

資料：

- 資料1-1 平成27年度知床五湖利用調整地区制度の運用総括
- 資料1-2 平成27年度 ヒグマ活動期運用結果について（詳細）
- 資料2-1 平成27年度 登録試験実施結果
- 資料2-2 平成28年度 登録引率者名簿（予定）
- 資料2-3 登録引率者の募集と養成研修のあり方について
- 資料3-1 平成27年度知床五湖シーズンオフの検討方針・スケジュール
- 資料3-2 知床五湖利用調整地区5年間の評価と課題整理（全期間）
- 資料4-1 平成28年度 ヒグマ活動期の運用について
- 資料4-2 平成28年度 モニタリング実施計画について
- 資料5-1 平成27年度指定認定機関収支報告
- 資料5-2 平成27年度登録引率者審査部会会計報告
- 資料6-1 知床五湖駐車場 駐車料金の改定について
- 資料6-2 知床五湖におけるキャンペーン企画について（報告）

- 参考資料1-1 平成28年度 知床五湖登録引率者の新規養成募集要領
- 参考資料1-2 知床五湖登録引率者 養成・登録・更新の流れ
- 参考資料2-1 知床五湖園地利用者数の推移（平成22～27年）
- 参考資料2-2 知床五湖地上遊歩道閉鎖状況一覧（平成16～27年）
- 参考資料2-3 知床五湖園地におけるヒグマ遭遇状況について
- 参考資料3-1 第33回知床五湖の利用のあり方協議会議事録（H27.3）
- 参考資料3-2 第23回知床五湖登録引率者審査部会議事概要（H27.11）
- 参考資料3-3 第24回知床五湖登録引率者審査部会議事概要（H28.2）

【議事録】

環境省（坂口）：本来であれば本協議会会長である釧路環境事務所長の西山が出席すべきであるが、所用により欠席のため代わってご挨拶させていただく。年度末のご多忙中にも関わらず、参集いただき感謝申し上げます。本協議会は1年ぶりの開催となる。知床五湖の利用調整地区制度は導入から5年が経過した。昨年は世界自然遺産登録10周年を迎え、記念式典等にご協力いただいた皆様に改めて御礼申し上げたい。知床五湖利用調整地区の運用については、これまで大きな事故もなく、環境負荷を軽減しつつ、2つの歩き方を安定的に提供できている。世界自然遺産にふさわしいエコツーリズムがこれだけの規模で成り立っているのは、全国的にもめずらしく先進的な取り組みであると考えている。また駐車場の拡張工事は完了し、渋滞緩和等に一定の成果があったと考えている。今後も五湖の貴重な自然環境を保全しつつ、よりよい利用環境の創出に向けて取り組んでいきたい。本日の会議では今年度の運用結果、来年度の運用計画および過去5年間の取り組みについての報告を予定している。忌憚なきご意見をいただきたい。

（1）平成27年度利用調整地区制度の運用結果・知床五湖園地利用者数について

資料1-1 平成27年度知床五湖利用調整地区制度の運用総括 説明

- ✓ 全期間を通じての利用調整地区への立入認定者数は過去最高の71,654人であった。
- ✓ ヒグマ活動期の認定者数については13,800人であり、制度開始年と比較し2倍以上となった。
- ✓ 植生保護期（夏）の認定者数は制度開始より55,000人前後で推移している。

資料1-2 平成27年度 ヒグマ活動期運用結果について（詳細） 説明

- ✓ ヒグマ活動期のツアー参加者数は過去最多であった。
- ✓ 昨年6月から実験的に導入した小ループツアーについて、今年度は5月10日から運用を開始した。運用開始が昨年より早くなり、ほぼ全てのツアー枠で実施回数が昨年度の実績を上回った。小ループツアーの催行率は、9時のツアー枠において月毎のバラツキが大きかった。
- ✓ 当日受付カウンターは昼と午後の時間帯の利用者が多かった。
- ✓ 今年度はツアー中の骨折という大きな事故があった。植生保護期や軽微なケガも含め、傷病者発生時の体制作りは今後の課題である。

知床ガイド協議会（若月）：資料1-2について、小ループツアー参加者数を示す資料はあるか。

知床財団（秋葉）：別資料にある。簡単に上げると、ヒグマ活動期全体で概ね12,000人のツアー参加者があり、小ループツアー参加者はそのうち約1割強である。

ウトロ地域協議会（桜井）：資料1-1について、植生保護期のガイドツアー組数は数えているか。

知床財団（秋葉）：申請組数は個人利用者によるグループも含めた全体数であり、ガイドツアーを限定する形で数えてはいない。以前、少し調べた際は全体の1割以下、おそらく5%程度であった。

編集注 植生保護期における地元事業所によるガイドツアーは、H26年度実績で849組8772名。全体に占める割合は、申請数ベースで4.4%、認定者数ベースで16.1%。

(2) 平成27年度登録試験結果、平成28年度登録引率者募集について

資料2-1 平成27年度 登録試験実施結果 説明

資料2-2 平成28年度 登録引率者名簿(予定) 説明

- ✓ 既存の引率者は29名が合格、新規養成者は5名が合格。
- ✓ 平成28年度の登録引率者は33名の予定。

資料2-3 登録引率者の募集と養成研修のあり方について 説明

- ✓ 積極的な募集強化の結果、遠方からの応募やガイド事業所以外の応募など、これまでとは異なったバックグラウンドを持つ参加者が見られた。
- ✓ 一方で、本業を別に持つ養成者は本業多忙により研修を断念する例もあり、依然として厳しい条件となっている。
- ✓ 新規引率者の養成は昨年に引き続き強化したい。一方で他地域との連携やカリキュラムの見直しなどより広い参画を求める観点から引率者の募集・養成のあり方を検討する必要がある。
- ✓ 制度導入から5年経ち傷病者発生時の危急時対応事例が蓄積されたことから「リスクマニュアル」の将来的な修正・改定を検討する。また過去5年間のヒグマ遭遇事例をとりまとめ「運用マニュアル」等に反映させる。

知床ガイド協議会(若月)：今の説明を受けて、新規登録引率者からの意見を聞きたい。研修を受け、資格を取得し、来年度から登録引率者を始めるにあたって不安はあるか。研修内容の検証を含めて素直な感想を伺いたい。

環境省(前田)：今年度の新規養成を受講し、新しく登録引率者となる吉川氏(しれとこ・フォーラム21)がこの場にいるのでコメントをお願いしたい。

しれとこ・フォーラム21(吉川)：来年度から登録引率者として活動する予定だが、不安はある。研修を通じてガイドを始めたのは昨年からであるが、想像していたガイドの仕事と現実との違いを実感している。ヒグマへの危機管理やお客様の体調管理を含めて無事にツアーを終わらせることが重要であるという認識を持った。ガイド業は慣れる仕事ではなく、常に緊張感を持ち続ける仕事だと感じている。

知床ガイド協議会(若月)：登録引率者を広く募集するのはいいことだが、応募者が全ての方が意識が高いとは限らないという懸念がある。ガイドへの憧れで気軽に応募してくる人たちにどのような研修をすれば引率者としての意識を高められるかを考えさせられる。

ウトロ地域協議会(桜井)：引率資格の継続の要件として、筆記試験を毎年受験することとなっている。これは、初心に帰るという意味や、緊張感の保持を再確認できる場と考えてよいのか。

知床ガイド協議会(若月)：筆記試験を受けることで緊張感を保っているわけではなく、日々の引率の積み重ねが重要と考えている。

ウトロ地域協議会(桜井)：毎年筆記試験を課している理由は。

知床ガイド協議会(若月)：制度は毎年変化するため、筆記試験はその確認の場でもある。登録引率者として制度の理解は重要である。

環境省（前田）：補足する。制度上は、引率資格の継続のためには、筆記試験と実地試験の両方を毎年受けなければならない。ただし特定の引率回数を超えた場合実地試験は免除されるため、実地試験を受けない引率者もいる。筆記試験の役割としては、若月氏のコメントの通りである。とはいえ、試験のみですべてを確認、把握できるわけではない。毎年 2 回、全ての登録引率者が参集する「ケーススタディミーティング」を開催し、引率中のヒグマ遭遇事例のディスカッションを行い、経験が浅い引率者にも共通認識の場を設けており、緊張感を喚起する場としても機能している。

知床斜里町観光協会（代田）：外国人利用者数のデータはあるか。

知床財団（秋葉）：最も正確にデータが取れているのはヒグマ活動期のツアー参加者数である。今年度は 2,150 人であり、ガイドツアー参加者数の 18%を占めている。また、伸び率は昨年度比で 165%と増加している。来園者全体における外国人の割合は、データの取りようがないが、おそらく 1 割以下ではないだろうか。

知床斜里町観光協会（代田）：今後も外国人利用者は増加すると考えられる。引率者の研修に外国語を取り入れるということだが、現状の対応状況について説明頂きたい。また、日本人と外国人の混合ツアーになった場合の軋轢などはないのか。引率者の語学スキル向上を含めた外国人対応は今後の課題ではないか。

しれとこ・フォーラム 21（吉川）：今冬にガイドをした実感だが、春節の時期はツアー参加者の 9 割が中国系外国人であった。彼らはガイド付きが条件のツアーに参加するためであれば、ガイドの会話力にはこだわらずツアーを申し込んでくる。しかし実際には、無言でツアーを行うわけにもいかず、外国人参加者との日常会話や危険を知らせる等、最低限のコミュニケーションが取れるよう、自分なりの英会話資料やツールを用意している。ヒグマ活動期においても同様に、英会話ができずとも各々のガイドの努力や仕組み作りでうまくやれるのではないか。

環境省（前田）：現時点では、養成研修のカリキュラムに外国語は含まれていない。以前、登録引率者向けに補助的な英語研修を実施した際、好評だったと聞いており今後も機会があれば引き続き実施したい。しかし引率者の養成研修は、ヒグマ対処法の習得が基本であり、外国語能力を問うものではない。自主的な研鑽に任せるとというのが現状である。混合ツアーについては個々の引率者がうまく引率しておられトラブル等はないが、参加者間では不快な思いをされているかもしれない。なかなか有効な解決策が見つからないのが現状である。引率者はどのような工夫をされているのか。

知床ガイド協議会（岡崎）：日本語の解説に英語解説を加えているため時間がかかるのは確かであるし、引率者自身の力量にもよるが、混合ツアーに特別大きな問題はない。今後は英語より中国語が話せるガイドが必要となってくるのではないか。日本人が中国語を覚えるより、中国人をガイドにする方が効果的と考えている。

（3）利用適正化計画（第 2 期）の点検について

資料 3-1 平成 27 年度知床五湖シーズンオフの検討方針・スケジュール 説明

- ✓ 今年度は利用調整地区制度を導入して 5 年目、利用適正化計画を改定（第 2 期）して 2 年目である。全体として利用者数は堅調に推移しており、ヒグマ等の安全対策は前進したと考えられる。
- ✓ 一方で外国人利用者の増加など、利用者の動態は変化しており利用機会の確保と安全対策は重要課

題となりつつある。

- ✓ 制度の今後のあり方については過去5年間の制度運用の結果をモニタリングデータからとりまとめ、その成果と課題を分析・評価し、平成28年にかけて今後の運用改善を検討する材料とする。
- ✓ 利用適正化計画の見直しが必要となれば、平成28年度中に方針を固め、平成29年度シーズンに改定実験等の見直し作業を行うスケジュールとなる。

資料3-2 知床五湖利用調整地区5年間の評価と課題整理（全期間） 1、2説明

- ✓ 利用機会については、制度開始以降、五湖の来園者数はおおよそ40万人弱で安定的に推移している。利用者の75%が高架木道（のみ）の利用者と推定されており、利用形態は大きく変化した。地上遊歩道の利用可能人数には、利用適正化計画には余裕がある。平成27年からは駐車場の拡張により、渋滞発生時間が緩和された。
- ✓ 安全対策については、ヒグマによる重大なトラブル事案は発生していない。また、ツアーの中止件数は減少傾向にある。制度がヒグマに対する安全対策に一定の役割を果たしたと考える。一方でツアー参加者の傷病等を原因としたトラブルは複数発生しており、件数も増加傾向である。

参考資料2-1 知床五湖園地利用者数の推移（平成22～27年） 説明

参考資料2-2 知床五湖地上遊歩道閉鎖状況一覧（平成16～27年） 説明

ウトロ地域協議会（桜井）：駐車場の拡張により渋滞発生時間が緩和した旨の説明があった。渋滞の発生については、入り込みに加え滞留時間も重要な指標である。これについて調査等は行っているか。

自然公園財団（古坂）：滞留時間はほぼ変わっていないと考える。ヒグマ活動期のツアー参加者であれば3～4時間である。

知床財団（寺山）：車両番号を控え、車両の出入り時間を測ることで滞留時間の把握は可能である。この調査は、数年前に北海道大学が実施しているはずである。

環境省（永瀬）：来年度にも同様の調査を行う予定である。

ウトロ地域協議会（桜井）：利用者の75%が高架木道を利用しているということであるが、地上遊歩道もヒグマ活動期には小ループツアーを運用し始めたことにより滞留時間が変化すると考えられる。利用者の滞留傾向を調査することで空いている時間帯に団体利用やガイドツアーを誘導することができるのではないか。また、団体利用が減っているということであるが、知床観光全体の傾向なのか相対的に五湖だけが減少しているのか。団体利用のあり方についての考えを伺いたい。

環境省（前田）：大型バスの駐車台数は明らかに減少している。一方で駐車台数の総数は増加している。知床全体の団体利用の傾向については、観光協会からコメント頂きたい。

知床斜里町観光協会（代田）：正確なデータはないが、ホテルからの情報では団体客は激減していると聞いている。知床全体の傾向であると考えられる。

自然公園財団（青木）：過去4年間の団体バスの駐車台数を申し上げる。平成26年度は駐車場拡張工事により参考にならないため省くが、24年度は5,680台、25年度は5,531台、27年度については4,466台であり今年度と24年度を比較すると1000台以上減っている。一方でマイカーは増加傾向である。

環境省（坂口）：ホテルからの情報によると、道東方面の観光においては外国人観光客もレンタカーを利

用しているとのことである。

知床ガイド協議会（岡崎）：空港のある千歳から道東方面は遠すぎる為、団体ツアー設定が減少している。

斜里バス（下山）：貸し切り団体バスを利用する国内旅行自体が減少傾向である。昨年は「知床に立ち寄るが泊らない」という設定のツアーが多かった。知床に連泊するツアーは集客不足のため催行率が悪い。

知床ガイド協議会（若月）：団体ツアーにおいて、知床地域を訪問しているが知床五湖に立ち寄らないツアーはあるか。

斜里バス（下山）：ほとんどのツアーは知床五湖が行程に含まれているが、知床五湖と小型観光船を選択するツアーも多く見受けられる。

知床ガイド協議会（岡崎）：団体観光客は小型観光船を選択する傾向が強い。観光船が欠航すると観光客は知床五湖へ向かうという現状からも明らかである。

資料 3-2 知床五湖利用調整地区 5 年間の評価と課題整理（全期間） 3、4 説明

- ✓ 利用者評価について、平成 22 年以降、平成 26 年まで毎年アンケート調査を実施した。制度の認知や支持態度、満足感についてはヒグマ活動期のツアー参加者が高い傾向にあった。ヒグマ活動期のツアー参加者については 5 年間のサンプルより経年的な検討が可能であるが、植生保護期やヒグマ活動期のツアー非参加者については 2012 年以降のデータはない。外国人への意識については、アンケート調査等が実施されておらず、意識調査のあり方に検討が必要。
- ✓ 利用期の設定については、利用調整を行う期間と区分は、ヒグマの出没状況を踏まえおおむね 3 年ごとに見直しを検討することとなっている。ヒグマの出没傾向や行動の予測は困難である。「ヒグマの活動状況に即した期間設定」という考え方やその他の要因についても評価が必要である。シーズン中に 4 つの利用期が存在するため「制度のわかりやすさ」や「説明のしやすさ」といった観点からの評価も必要である。第 24 回審査部会（参考資料 3-3）では、ヒグマ活動期の拡大や利用期の統一についてアイデアが出された。公園全体への影響を考慮した議論が必要と認識している。

参考資料 2-3 知床五湖園地におけるヒグマ遭遇状況について 説明

- ✓ 知床五湖園地全体のヒグマ目撃件数は平成 24 年と平成 27 年が突出しているが、公園全体も同様の傾向である。
- ✓ 地上遊歩道での目撃件数は月別で見ると 7 月がピークでヒグマ活動期と合致するが、5・6 月の目撃件数はさほど多くない。また、植生保護期である 8 月以降も一定の目撃件数があり利用期の設定に合理性があるとは言いきれず、利用者への説明が難しい場合もある。

しれとこ・フォーラム 21（小川）：資料 3-2 の利用者評価について。ヒグマ活動期のツアー参加者以外のアンケートを実施していただきたい。

環境省（前田）：近年実施されていない対象へのアンケートについて必要性は認識している。平成 28 年度は外国人を対象に実施する予定。

知床ガイド協議会（若月）：参考資料 2-3 において、年毎の出没傾向がまとめられているが、目撃件数の多い年の個体情報について知りたい。普段は目撃されない個体が出没しているという理解でよい

か。

知床財団（寺山）：ヒグマ活動期においては引率者から詳細な目撃情報が得られるため、個体情報も絞り込めるが、植生保護期においては一般観光客からの情報が主体となるため、不確定要素が多く精度に差が出る。昨年に関しては、3～4組の個体が五湖園地内で活動していたという傾向がわかる程度である。この5年間でエゾシカの捕獲も進んでおり、その影響は長期的な視点で注視しているが、年毎の明確な傾向は出ていない。

知床ガイド協議会（若月）：目撃情報が少ない年について、その前年まで園地内で目撃されていたヒグマはどこへ行ったのか疑問であった。

環境省（坂口）：目撃情報が多い年は、普段出てこない個体が出てくるのか。

知床財団（寺山）：餌資源の制約が要因となり、ヒグマの行動圏が拡大することにより、大量出没が発生すると考えられる。特に7月はエサ資源が乏しいシーズンであり、やむなく人前に出てくるヒグマも多い。

知床ガイド協議会（岡崎）：来期に親離れするクマはどれくらいいるのか。

知床財団（寺山）：1歳連れの親子で行動していた子の多くは独立すると考えられるが、よくわからない。

知床財団（寺山）：利用期の見直しは、大きなテーマだと考えている。これを、次の利用適正化計画改定の俎上に載せると考えてよいのか。5年間の総括として利用者から最も意見が多かったのは、利用期がわかりにくいという点である。現在、シーズン中に4つの利用期（植生保護期《春》、ヒグマ活動期、植生保護期《夏》、自由利用期）があり、次々と入れ替わる状況である。多くの利用者にとっても利用期をシンプルにすることはメリットがある。資料3-2の「利用機会について」で説明があったように、ヒグマ活動期については、利用適正化計画の改定を含め改善が進んでいる。一方、植生保護期については大きな見直しがないまま5年が経過した。植生保護期の制度をわかりやすく変更する余地があるのではないか。資料3-2の「安全対策について」で記載されている通り、植生保護期のレクチャーによる情報提供は知床五湖のみならず国立公園全体の安全対策にも非常に有効との評価を頂いている。また知床五湖以外でのレクチャー実施のあり方をこの協議会で議論していただきたい。

環境省（坂口）：知床五湖植生保護期のレクチャーは利用調整地区とセットになっているものであり、国立公園全体の安全対策の話とは切り分けて議論すべき。

ウトロ地域協議会（桜井）：レクチャーを知床五湖以外の別の自然系施設で受けることができれば利用の流れがスムーズになるのではないか。レクチャーはフレペの滝や他のエリアを散策する際の安全対策としても有効である。レクチャーの利便性向上や知床はヒグマがいる場所であるということを観光客に理解させる上でも、レクチャーを受ける機会を増やす事には賛成である。

環境省（坂口）：レクチャーを他の場所で事前という話と国立公園に入域する利用者全てに対するレクチャーの話の2つの話があるが、国立公園全体の利用を目的とするレクチャーについては適正利用・エコツーリズム検討会議の「外国人向け情報発信の強化」部会において知床財団さんが提案されたなかで議論されている。実施においては情報提供の場所や体制の問題があり、五湖のあり方協議会で議論すべきことではない。

しれとこ・フォーラム 21（小川）：制度設計段階においてもホテル等でもレクチャーを受けられるようにしようという議論はあった。将来的にはいろんな場所でレクチャーを受けられるようにしてほしい。

環境省（坂口）：知床全体のヒグマ対策や情報提供のあり方については、この協議会ではなく別の場で議論するのが適当。

しれとこ・フォーラム 21（吉川）：知床全体のヒグマ対策の必要性は認識している。一方、知床五湖の制度はシステムとして運用されており、レクチャーを別の場所で受けるという運用はややこしくなる。現状の運用体制はそれなりにうまくいっている。これとは別に、知床全体のヒグマ対策・情報発信は観光協会等が中心となり広報すべきである。

ウトロ地域協議会（松本）：坂口課長の指摘の通り、公園全体の機能に関わる話題は切り分けて議論すべき。「(6) その他」において意見を出してはどうか。

知床ガイド協議会（若月）：利用期の設定について話題を戻したい。利用期の設定については、観光客の動向もあり、ヒグマの行動のみを根拠として設定することは困難。例えば春の植生保護期は、ほぼ毎年積雪により大ループが閉鎖されている。なぜ大ループを解放することができないのか。ヒグマについては、自己責任での立入が可能なのに、積雪ではそうならないのか。

しれとこ・フォーラム 21（吉川）：観光地として一般利用者に供用している以上、管理責任がある。雪などの自然を相手にしている以上、環境が整うまで待つのが自然ではないか。しかしながら観光事業者としては、カレンダー通りの運用を望む気持ちは同調出来る。

自然公園財団（古坂）：春の植生保護期に大ループを閉鎖する理由は、積雪だけでなく倒木処理の問題もある。自己責任として利用を認めても遊歩道外を歩いたり、踏み抜いたりしてケガをする可能性が高い。むしろこの時期はヒグマ活動期として引率付きでの立ち入りを認めることで問題解決が図れると考える。

知床ガイド協議会（若月）：ヒグマの出没状況やフィールドコンディションと利用の需要とのバランスが合わないのが現在の課題ではないか。積雪もその課題の一例である。

知床斜里町観光協会（松田）：知床全体のヒグマ対策については、この場での議論は馴染まないと考える。しかし、利用期の設定については、知床全体のヒグマ管理方針と関係する部分が多い。ヒグマと人のあり方については適当な場でしっかり議論することを希望する。そうすることで知床五湖の制度をどうすべきかおのずと見えてくる。これまでのみなさんの意見を統合すれば、開園から7月末まではヒグマ活動期、8月以降は植生保護期という分け方が出来、制度の説明もしやすくなる。複数の場所でレクチャーを受けられるアイデアについては、一見利便性が向上するように見えるが、制度を複雑にする可能性もある。また、現地のレクチャーには、人数調整の機能や緊張感を伝える役割もある。それぞれのメリット、デメリットを整理して議論を進める必要がある。

知床ガイド協議会（岡崎）：レクチャーは知床五湖のみとし、それ以外は知床国立公園へ入る際のヒグマへの啓蒙活動の一環であるという捉え方をすればよいのでは。

しれとこ・フォーラム 21（小川）：フレペのクマ問題も五湖のクマ問題も変わりはない。レクチャーは多くの施設で行わなくても、まずは世界遺産センター、知床自然センターで始めればどうか。そういった方向での検討を希望する。

しれとこ・フォーラム 21（吉川）：ヒグマへの啓蒙やえさやり禁止も含めて情報発信は必要である。

知床財団（秋葉）：知床五湖の立入認定の要件として実施しているレクチャーを多拠点化するという提案であり、この場で取り扱うことが適当である。それが、五湖の制度を活かしながら公園全体の軌轢低減に貢献する。しかしながら他施設でのレクチャー受講は制度を複雑にする可能性があり事前の

実験等が必要となる。レクチャーの多拠点化については、利用適正化計画（第2期）の改定を事務局が提案した際に検討課題ではなく、実施事項としてあげている事項である。今回はそれを再考する機会でもある。

知床斜里町観光協会（松田）：知床を訪れる観光客全員が教育的な情報提供を受ける仕組みは必要である。実施場所だけでなく、効果的な実施方法も含めて検討すべきである。

環境省（前田）：この場で結論は出せない。五湖以外でのレクチャーのあり方、春の植生保護期のあり方の2つの論点があるようなので、それぞれメリット、デメリットを一度整理させていただきたい。

ウトロ地域協議会（桜井）：利用期のあり方について、ヒグマ活動期と植生保護期の日程をあらかじめ分けておくのではなく、シーズン全体を植生保護期とし、必用に応じてヒグマ活動期的なしかけを挿入するという考え方はいかがか。

環境省（前田）：利用期の設定は、告示によって定められている。柔軟に設定を変えられる仕組みとはなっていない。

しれとこ・フォーラム 21（小川）：レクチャーの効果が実証されてきているならば、ヒグマ活動期の期間を見直してはいかがか。これは、前回の協議会でも意見として発言した。わかりやすさを優先すれば、全期間を植生保護期とし、ヒグマのリスクが高い場合には、遊歩道を閉鎖するという運用も考えられる。ヒグマ活動期のツアー参加者数は、五湖全体の利用者の1割にも満たないにも関わらず、多大なコストをかけて運用している。費用対効果に見合っていないのではないか。

知床斜里町観光協会（松田）：ヒグマ活動期の決め方は、目撃件数の多寡だけではなく、ヒグマの生活様式や行動パターンを勘案して決めた経緯がある。コストについては、受益者負担と公的負担のバランスが重要である。

しれとこ・フォーラム 21（小川）：ヒグマ活動期と植生保護期の境目である7月の末は宿泊客が減る。ガイド利用は特例であり、ガイドツアーを一般化するような広報は控えていただきたい。費用負担を回避する利用者もいる。

しれとこ・フォーラム 21（吉川）：以前は多くの観光客が安い料金で利用できる地上遊歩道になればいいと考えていたが、現在は観光のあり方が変わっており、少し見方を変えていく必要があると思っている。ガイドツアーでの地上遊歩道利用は素晴らしい体験を共有できる。新しい知床観光を模索していく姿勢も必要である。

知床財団（寺山）：ヒグマ活動期の登録引率者も植生保護期のレクチャーも評価が高い。植生保護期の懸念は、観光客からのヒグマ遭遇報告が遅れ、ヒグマ遭遇の危険性が増幅するということである。利用期の設定について方向性を検討するならば、植生保護期をベースとしながら、ヒグマ活動期のメリットを取り入れるという視点で実験したらどうか。例えば、植生保護期にヒグマ活動期登録引率者が無線を持ち、ヒグマ出没時は無線で情報を共有して閉鎖などの管理活動に引率者が協力するヒグマ活動期のような仕組みは有効だと考える。

資料3-2 知床五湖利用調整地区5年間の評価と課題整理（全期間） 5、6説明

- ✓ 登録引率者の養成と研修について。登録引率者の総数は毎年微増傾向である。
- ✓ 自然環境の保全について。植生の後退が懸念される箇所においては環境省で注視していきたい。

知床ガイド協議会（若月）：自然環境の保全について、植生モニタリング結果の写真は地上遊歩道か。

環境省（前田）：地上遊歩道と植生の境目の部分である。

ウトロ地域協議会（桜井）：植生後退の可能性は読み取れるが、逆に回復した箇所はあるのか

環境省（前田）：調査プロットは、踏圧による悪影響が予測される箇所を選定しており、すべてを把握しているわけではない。調査地点において明確に回復している箇所は見受けられない。

ウトロ地域協議会（桜井）：では植生保護期を設けても植生の保護になっていないのか。

環境省（前田）：その可能性はある。植生保護期はヒグマ活動期のように引率者がおらず、利用者が遊歩道を踏み外していることも考えられる。しかし、利用者の影響だけで植生が後退しているとは断言できない。

知床財団（寺山）：大ルートについては、制度導入により歩道閉鎖が減り利用者が増えている影響も考えられる。

知床斜里町観光協会（松田）：寺山氏の指摘の通り、大ルートは利用者が増加したことで遊歩道が拡幅した可能性は考えられる。ただし、シカの採食の影響も強いと考えられ、利用者が原因かどうかは一概には言えない。遊歩道の形状も一律ではなく、幅や段差は様々であることも歩道踏み外しの要因である。定点撮影の意味が無いとは言わないが、この結果だけで植生への影響を判断することは不可能。ポイ捨てなどの問題行為は減っており、レクチャーの効果は確実にあるといえる。モニタリングにあたっては、こういったことも踏まえて総合的に見ていく必要がある。

（4）平成28年度の知床五湖全体スケジュール・ヒグマ活動期の運用方法について

資料4-1 平成28年度 ヒグマ活動期の運用について 説明

✓ 28年度の運用について現行からの変更はなし。

資料4-2 平成28年度 モニタリング実施計画について

✓ 外国人向けアンケートを実施する予定である。

✓ 計画に記載はないが、滞留時間について調査を実施する予定である。

知床ガイド協議会（若月）：資料4-1について、小ルートはガイド協議会が主体となり、引率者有志が参加して運用する仕組みであることをご理解頂きたい。収益状態が悪化すれば安定的な運営が立ち行かなくなる可能性もある。

（5）指定認定機関の平成27年度収支報告、審査部会会計報告

資料5-1 平成27年度指定認定機関収支報告 説明

資料5-2 平成27年度登録引率者審査部会会計報告 説明

✓ 指定認定機関の収入は、認定者数の増加により伸びたため、黒字決算である。

✓ 審査部会会計の次年繰越金の内訳は、主に平成25年度に実施した増枠実験の手数料収入である。

資料6-1 知床五湖駐車場 駐車料金の改定について 説明

- ✓ 駐車料金は平成 24 年度より道内、道外支部共に改定が続いており、知床五湖駐車場も平成 28 年度 4 月より駐車料金を改定する。

資料 6-2 知床五湖におけるキャンペーン企画について（報告） 説明

- ✓ 平成 27 年度 知床五湖くまレク見てトクキャンペーンと知床五湖ローカル割引の実施結果報告。
- ✓ くまレク見てトクキャンペーン過去 3 年間のまとめ。

別添資料 2016 年 朝の大自然号（春）事業計画案 説明

- ✓ 昨年より運行期間を短くし、計 8 回の運行とする。

ウトロ地域協議会（松本）：朝の大自然号について、駐車場は閉鎖時間だが、駐車料金を公園財団に支払う根拠は。

自然公園財団（古坂）：トイレ使用と高架木道の管理費として通常の駐車料金を頂くこととした。

（6）その他

ウトロ地域協議会（松本）：先の話題と関連する部分であるが、この協議会はウトロ地域協議会の特別委員会として設置された経緯がある。現在会議が非常に多く、議論も細分化されつつある。この協議会においては、五湖の制度に関する議論だけではなく、広く地域の課題を取り上げて頂きたい。

環境省（坂口）：知床は会議が多く、色々な会議の役割は一度整理すべきであると考えている。以上、質問意見等なければ閉会としたい。長時間のご議論ありがとうございました。